

ポケットジャーナル

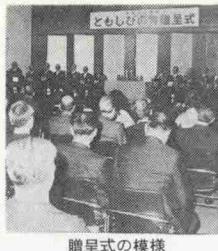


★ 第5回ともしびの賞

13名4団体が受賞

昭和54年度ともしびの賞

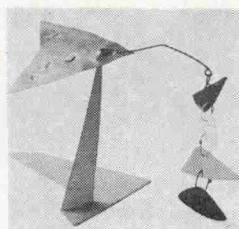
(兵庫県主催)の受賞者が決定し、11月19日午後2時から兵庫県民会館にて贈呈式が行われた。



式は劇団神戸の小倉啓子さんによる「灯の詩」朗読のあと、坂井県知事が「それぞれの地域で、温かい、明るいともしびを灯してい

る方たち、時代を越えて文化を伝承し高めて来た人たちは敬意を表する」とあいさつ、13名4団体に賞が贈られた。また式典につづいて祝賀懇談会ももたれた。

受賞者は次の通り。



作品「真鍮の燈」

★ 「カルダー」の世界

県立近代美術館で開く

12月22日から2月3日まで県立近代美術館で、現代アメリカ美術の巨匠アレキ

サンダー・カルダー（1898-1979）の全貌を紹介する「カルダー」の世界展」が開かれる。

動く彫刻、モビルを生

みだしたカルダーは、ペンシルベニアのロートン生ま



華麗なインド舞踊

★ 関西日印文化協会が創立20周年を迎える

在阪神間の印度人達と印度のいきの日本人が地道に積み重ねて来た友好の集い

「関西日印文化協会が創立20周年を迎える

年を迎えて、11月17日午後6時30分から北野町のインドクラブで、記念パーティが開かれ、約300人が集つた。

また、誰も細く長く運動できるモットーとしているのも特長であります。十五周年行事のひとつとして、「記念冊子の発行」を企画して、目下編集にとりかかっています。今後も、今までどおり「草の根福祉運動」として、着実に推進していき、わが国の福祉が、一步一歩と前進するよう歩み続けて、みなさんのいのいのうのこ支援ご協力をねがいたいします。

誕生日ありがとうございます運動本部
651 神戸市兵庫区御幸通1-1-1
神戸国際会館
電話二五一八一六一内線三一六

れ。幼時から彫刻一家の影響を受けてオモチャを創り工科大を卒業後、木彫や針金彫刻を作り、パリでその「サーカス」作品は喝采を浴びた。以来続々と作品を自由な遊びの心で制作、造形美術の世界に新しいモビールという動の世界を拡げた。今回はモビール30点、スタビル12点、デッサン油彩、版画から針金彫刻家庭用品迄42点が紹介される。

これを機に県立近代美術館はモビール「赤い噴水」を900万円で紹介のバールス画廊から購入した。(入場料700円)高・大(400円)小・中(100円)

「サーカス」作品は喝采を浴びた。以来続々と作品を自由な遊びの心で制作、造形美術の世界に新しいモビ

ル」という動の世界を拡げた。昭和40年5月8日、神戸市長誕生日ありがとうございます運動は、本年5月8日で発足以来満十五年を迎えます。

昭和40年5月8日、神戸市長誕生日ありがとうございます運動は、本年5月8日で発足以来満十五年を迎えます。

十五周年ご支援感謝!! 誕生日ありがとうございます運動は、本年5月8日で発足以来満十五年を迎えます。

誕生日

ありがとうございます運動



づくりの品々の展示即売会が行われた。

これは、月刊英字紙関西タイムアウト紙の購読者やクでは火鉢、タンス、陶磁器、織物の他、奈良の仏教美術品なども陳列され、また、手

絵画は約40点、さらに、手づくり品では、チュニジアの手織りのカーペット、タ

ピストリー、七宝焼きなど

数多くの品々が展覧され、終日賑わった。

開西タイムアウト／神戸市生田区北長狭通2-14-23 賢安ビル3階 電話3321-4533

★戦前日活名画祭

今春 神戸で開催



「地方の時代」を体現
本誌「月刊神戸つ子」
をはじめ全国のタウン誌
11社が協力して全国ネット
の月刊旅行雑誌「旅行
アサヒ」が来春3月号創
刊号として発刊される。

勿論、地域に根ざした
旅行の案内記事だけに終
らず地域情報、つまり文

化的催しや四季の行事などを詳細に取材する独自の手づくり記事を軸に、現在、旅の記事がどちらかといふとヤング向けのものが主流とされているが、「旅行アサヒ」では本格派の年代、アダルトな旅をを中心に編集、流れに棹をさす。

本来的に旅のものつていう文化的な風物に接するという特質、自然を愛し文化に触れるという旅の魅力を見直そうというので、地方に深く根ざした文化を発見し、更に

今やロマン・ボルノオンリーになってしまった「につ

かつ」だが、かつては、伊藤大輔、伊丹万作、稻垣浩、山中貞雄、内田吐夢、田坂

具隆らが名作を次々と生み出していた。その戦前の日活映画が神戸で見られる。

1月13日(土)士兵隊／将軍と參謀と兵／爆音、15日(祝)鼠小僧旅枕／河内山宗俊／江戸最後の日／赤西勢太、27日(日)血煙高田馬場／丹下左

膳余話百万両の金／鞍馬天狗角兵衛獅子の巻／官本武蔵／乗寺決闘、2月2日(土)元禄次郎物語／路傍の石／風の又三郎、9日(土)汗／土／五人の斥候兵。会場／神戸文化

小ホール前売1200円、当日1500円通し券(5日間セット)3500円通し券(5日間セット)35

□問い合わせ／ハタケヤマ・アートディレクション美331-9078

★神戸出身の内海美幸さん

化的催しや四季の行事などを詳細に取材する独自の手づくり記事を軸に、現在、旅の記事がどちらかといふとヤング向けのものが主流とされているが、「旅行アサヒ」では

本格派の年代、アダルトな旅をを中心に編集、流れに棹をさす。

本来的に旅のものつていう文化的な風物に接するという特質、自然を愛し文化に触れるという旅の魅力を見直そうというので、地方に深く根ざした文化を発見し、更に

新曲発表「いのち唱」

兵庫高校出身の歌手、内

★タウン誌の草分け「銀座百点」が300号記念に日本書籍より池田弥三郎編によるエッセイ集「銀座点描」(1000円)を出版されました。おめでとうございます。

★タレントの小山里子さんが、

六甲から御影へ転居、T568 東灘区

御影山手五丁目北御影アーバンラ

イフ300号(1月7日)七八(八二)

○七五三

★橋本開雲の孫にあたる白沙村莊

事務局長の橋本帰一さんが、この

ほど評論・随筆集「マイウエイ論

々」を光村出版から出版。十

月三十日京都ロイヤルホテルで

出版記念会が開かれました。

★画家の石井龍春さん(2月のN

H.K銀河ドラマ「夜叉四時四十分よ

り」)小泉喜美子作「冬の祝婚歌」

のタイトル装画を担当。お楽しみ

に。又、美術公論社から出版され

た「ユキの回想」(ユキ・デヌク

ス、河盛好蔵訳)の表紙絵も描か

れています。(1800円)

★女性のるばライターとして活躍

されたいった鶴園の筆者)が、芦屋

シーサイドタウンに未来都市の実

験を語る記事を書いたため東

京より芦屋へ転居しました。

69芦屋市若葉町4-1-1 1951

★東京赤坂東急ホテルの3Fで、

しゃぶしゃぶの店「花くま」を開

いて十年。鶴巣洋子さんが十

二七年より赤坂みすじ通りの皆

川ビル4Fに、ウドヨコの店

「花くま」をオープンしてま

すます意欲的に頑張っています。

東京都港区赤坂三丁目十五ノ赤

坂皆川ビル四階O(三)(五八三)

八七九〇

★「輪」同人の岡田裕輔さんが詩

集「続・サラリーマン」(三千円)

を、「また、なかへんじさんが詩

集「悪い収穫」(千八百円)をそ

れぞれ東京館出版から出されました。

△小泉

●KOBE POST

●第4回神戸女流文学賞受賞作品

影と棲む



田口佳子

絵/田中徳喜



相手の存在を、たぐりよせてているのかよせられているのかよくわからない。

わかつているのは、お互いの存在感がその一瞬に、他者との繋がりから離れて際立っているに違いないということだった。

相手も多分、床の中や洗面所や、また、彼の毎朝の習

慣である目ざめに飲む濃い煎茶の中での

「今日は行つてみようか」

一度、それを確かめたくて、父が来た日に

「今日はここへ来ようといつ思ったの？」

と訊ねてみたことがあった。

彼は不審そうにゆつくりと目をしばたかせて、ちょっと考えて口ごもつたが、

「いつつて…顔を洗いながら思ったよ」

と答えた。それが苑子の心の鍵孔みたいな部分にかちつと嵌まつた。その後、二度と訊ねようとは思わなかつた。

何度か確かめれば、きっと予感の外れた時やちぐはぐな思いにも行き当つただらう。だから苑子は訊ねなかつた。父親と自分の空間はロツクされて、今もつて何ひとつとも入ることはできない筈である。

ドアが叩かれた。

ぼと、ぼとという聞きなれた遠慮っぽい音である。開く瞬間はほろ苦い。

微笑ともいえぬ薄っぺらな笑いを一度だけ頬にさつと片よせて、苑子は「ああ」と頷く。とびつくようにして扉を開き、全体で招じ入れた日はもう遠くなつてしまつた。

それが時として、何だか後ろめたい思いである。

入つて来る時、彼は決まって狭い三和土の上に目を落とす。苑子以外の履物がないかどうかを確かめているのだ。そうしながら、のれんの下から視線をのろりと這い

こませて靴を脱ぐ。誰もいない部屋に上がり、食卓の前に坐るまで、一言も口をきかない。

坐つて、一服吸いつけてからも黙つて。苑子の化粧の手がまた動き出した。

「紫陽花が咲いたよ、今度持つて来てやろうか」

父は鏡中の苑子に話しかける。

部屋には装飾らしいものが何もなかつた。嫁いだ時の荷物は、離婚して嫁家から運ぶ途中で家具類は処分し

て、中身だけを衣裳箱に詰めて運びこんだ。

花瓶一つ、それらしいものがないのを侘しいと思う間もなかつたし、少し落ち着いた今も別に買いたいとも思はない。

一人で、ただ生活するだけのすっぱりした部屋を好もうと思つて。

「いらないわ」

「あんなに紫陽花が好きだつたじやないか、土を替えて今年はピンクのきれいなのが増えたよ。あれも仲々いい」

「欲しい時は花屋で買うから」

植え込みの多い実家の庭を思つた。

昌男と暮らした高畠家の庭も、植え込みが多かつた。苔や水が配されて、植物の何かを通してしか陽の当たらぬ土の部分は、いつもじとじとやわらかだった。化粧を済ませ、着替えるために、三面鏡を置いた板の間と、父が坐つてゐる畳の間を仕切るカーテンを引く。身を縮めながら着替えた。父はこうして、苑子が店へ出るまでの午後の僅かな時間に来ることもあつたし、朝昼兼用の遅い朝食の時などにもやつて來た。

いずれにしても、限られた短い時間を、別にこれといった話もなく、町角で彼女が幼い時から好物だつた焼栗をみつけたといって、一袋買つて來たり、「間に合つてよかつたな」と、ほろ温いフライド・チキンの紙箱を開いて自分も一緒に食事をしたりした。だから、女の一人暮らしの部屋なのに、流しの横の小さな食器棚には、男物の茶碗や箸が父用にいつも用意されていた。

父の生活はかなり自由で、現職を退いても、長年の貿易事務の経験が買われて、自由出勤の形での仕事が絶えることもなく、その合間に縫つて苑子のアパートに出入りし、泊まって行くこともあった。

苑子の支度が整うと、二人は部屋を出る。

施錠の金属音にも慣れた。三十歳まで親の家にいた彼女にとって、一人きりの生活を守るアパートの鍵は、初めの頃は安全性を約束するより孤独の象徴のような気が

したものであった。

父は知らん顔でさっさと先へ行く。

隣り近所の住人と顔を合わせても、会釈もしなかった。

こんにちはと声をかけられても、行つていらつしやいといわれても苑子が腰をかがめる。

何とはない好奇の色はどの人の眼にもあり、何人かが集まっている傍を通り過ぎると、背後で話声がふいと止むのは、あまり感じのいいものではなかつた。



移り住んだ当時は、「父ですの」といっても信じていかないの方が多いようだつた。

今もって、その辺のことはどうかわからない。長身で、六十歳を越した今も、ブルーグレイのスーツをぴたりと着こなす彼と、職業柄、華やいだ雰囲気の装いの苑子とは、あまり容貌も似ていないし、並べばちょっと味のあら男と女の間柄に見えて仕方がなかつた。若い頃はそれが自慢だつた。

どこへ出かけるのも、父と娘は一緒で、母は排された。

買物をする時、日頃はお父さんと呼んでいる彼女が、わざと語尾を曳いて「パパア」というと、店員たちは決まつて愛想笑いに皮肉を刷いた。それがひどく満足だつた。娘の頃の苑子は、平々凡々と、年月だけを惰的に重ねたような夫と妻の立場より、世間一般が認めぬ隠れた男女の立場の方が本当の愛であるような気がしていた。

自由で、緊張感と不安感に揺られる一日一日に、純粹な本音がエキスのように詰めこまれる：そんな甘い空想の拡がりがあつた。

同じような年格好の男友達は、皆どこか共通した頼りなさと退屈さで、苑子の心を惹きも繋ぎ止めもしなかつた。

品物を娘が選び、父親が支払う。幸せな安定した場面を、他人の曖昧な皮肉っぽい微笑や、わざとらしい無表情が状態を一変させる。そこに置かれた父と娘が、艶っぽい男と女にすり替えられる時、苑子の茶目っ気たっぷりの満足感に、いささかの秘密めいたよろこびが加わつていた。本当に、そういう立場の女になつたようなくすぐつたいた錯覚だつた。

もう、買物に二人で行くことも、コンサートや展覧会に出かけることもなくなつてしまつた。芸術的なもの一切を解さぬ母に比べて、幼い頃から感受性豊かな、美しいものに強い憧れをもつ苑子を、父がどんなに愛し、大事にその感情を育てようとしたかは、苑子自身が一番よく知つていた。

この頃は、時間的に余裕のないせいもあるが、やはりどことなく弾むものが萎えていた。それを寂しいと思う東の間の思いしさ、現実の生活での些細な出来事が攪つて行つてしまつた。

「じゃあな、そのうちにまた来るよ」

「ええ、気をつけてね」

二人は別れる。

父はいつものように、骨董屋を覗いたり、古本屋で時

を潰したりして家に帰るだろう。

後ろ姿は見るのも、見られるのもいやで足早に人ごみの中に走るなりと紛れた。

駅までの道を並んで歩きながら、父は一度家に帰つて来ないかと何度も誘うようにいつた。苑子は、結婚してからも折りにふれ、家に出入りしていたが、昌男と別れてからは一度も帰つていなかつた。それを父は、世間体を気にしていると思つてゐるらしい。

「お母さんも最近、弱つてな。時どきお前に会いたいといつてゐる」

一度折りを見て帰つてやつてくれと、今度は頼む口調になつていて。苑子は答えなかつた。会いたければ自分が来ればいいのだ。母は苑子のアパートに一度も足を向けたことがない。苑子も来いと誘ひもしなかつた。

父は、じやあといつものように、ちょっと足を止めて片手を胸の辺まで上げる。

あとは人の波が二人を呑みこんだ。

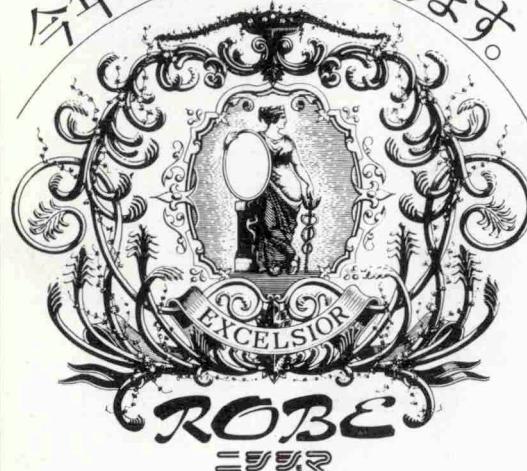
バスを降りて歩きはじめてから、サングラスをかけた。眩しく白い陽を反して、初夏の町並みが飴色に沈んだ。色彩とは不思議なものだ。

陽の下で、家も木も石も電柱も、サングラスのレンズを通すとぴたつと呼吸を停止した。

△△△△

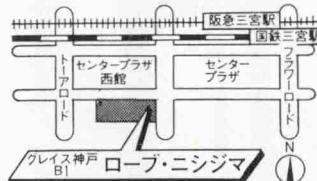
クリーニングから
ファッショントメンテナンスの
スペシャリストへ

今年も進化しつづけます。



ローブ・ニシジマのサービス内容

- ファッショントメンテナンスのすべて…型くずれの防止、素材感の回復、お客様の好み通りの仕上げ
- いつまでも美しく着るためのアドバイス



神戸市生田区三宮町2丁目11
グレイス神戸 B1 ☎ (078) 332-2440 (水曜定休)

ハイセンスの紳士服で
最高のおしゃれを



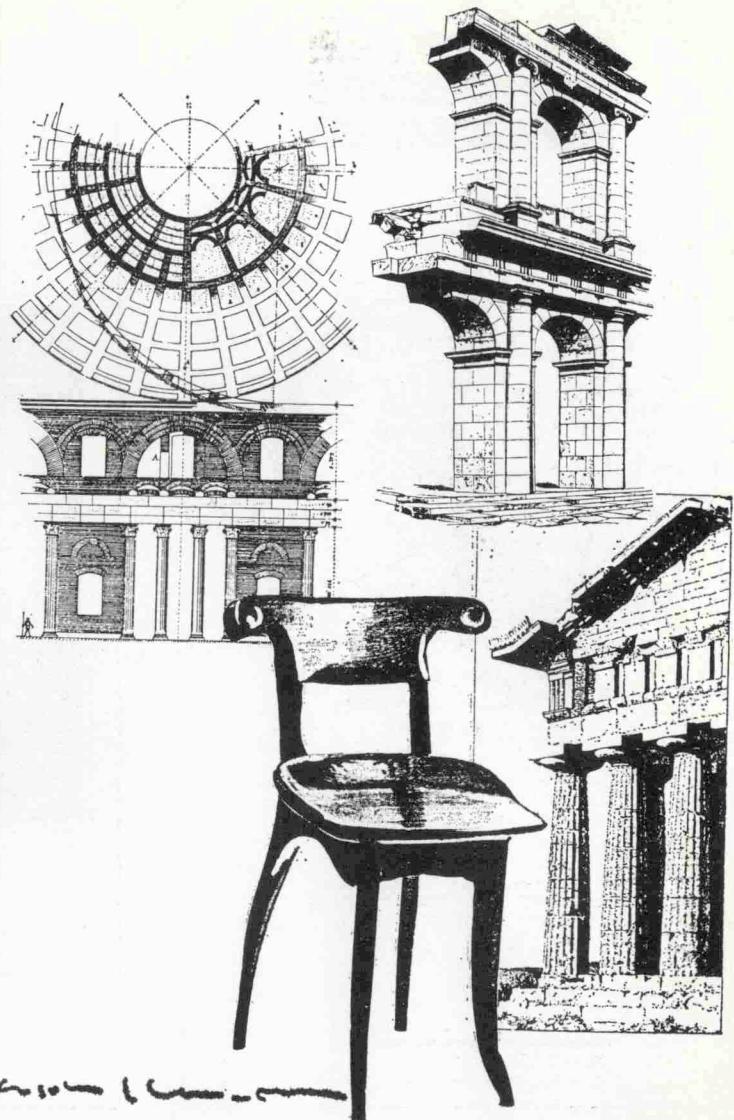
三恵洋服店

神戸・元町4丁目 ☎ (078) 341-7290

溶ける闇

高木敏克
絵／木村光佑

■第4回神戸文学賞受賞作品 ■



いのちに返答ができるものなら、
いのちの答えは心臓と眼と肺から出る。

大都会の商店と四辻の真中から躍り出る。

W·H·AUDEN

△SPAIN 1937△

石灰岩の大地には、わずかばかりの灌木がへばりつき、必死で自分たちの土を握り締めている。その黒々と点在する繁みを繋ぎながら、鉄道は銀色の長い根を延ばし、泡のように海に被さる白い半島に食い込んでゆく。純白の岩盤の上を走る列車の青い影は、ようやく白みかけた水平線を暗示していたが、やがて朝焼けが列車の窓を突き抜けて、パステルカラーに岩肌を染めあげる。

夜行列車は地中海を左に見ながら、バルセロナの港の近くに停車した。放り出されたぼくの体が海岸通りを西に真っ直ぐ歩くと、つきあたりの広場の中央では記念塔が長い人差し指のように大空を突き刺している。広場のベンチには盲目の男が一人、腰を掛け、しきりに鳩の啼き真似をしている。石畳の上には、数羽の鳩が紫陽花に見ながら、火をつけると、煙草はズボンの中ですっかり汗をかいていて、煙を吹きあげると全身の汗が青空一杯に蒸発し、また一息吸い込むと、今度はぼくの体が大空に吸い込まれるのだ。

羽音は突然鳴った。青空に散弾銃の穴をあけながら、鳩の群が旋回すると、広場の敷石をカタカタ鳴らして、花売りの荷車がロバに曳かれてゆく。ベンチの男はサンガラスに無数の鳩を映し、花売りの老婆を罵っている。

それに応えて荷車のロバは大きな耳をピクピクさせて、あわれな声を張り上げる。男は宝くじを売っている。首から紐で吊した板の上には、ひらひらと白いくじ札が、波の形に揺れている。白波を蹴立てて吹き流しのようにな駆け抜けるオートバイの帶状の黒い音が聴えてくる。それらが少しずつ広場の静寂を崩してゆくと、盲人はいい杖でカタカタとリズムをとりながら、△万人のための宝くじ、あなたのための宝くじ、一万倍の幸福のためには、一万分の一になれ。△と叫ぶのだ。盲人の声が広場を走り抜け、ゴチック建築群の壁にぶちあたると、それを誘い水にして、群集の雜踏が激しい咀嚼音のように近付いてくる。人々はゴチック建築の谷間から空まで震わす唸りをあげ、地の底から盛り上がる呼吸のようにうねりながら吐き出されてくる。そこには女陰の形の門があり、そこから奥にはプラタナスの並木道が青々と繁り、産道のように暗いトンネルをぶちぬいている。激しいエネルギーの音はそこから聴えてくるのだ。群衆は砦の門を踏みたおしてなだれこむ群盜の勢いで、一瞬にして広場を埋めつくし、逃げ場を失ったぼくの体は何時のまにか、城壁のように林立するゴチック建築群の壁に張り付いている。目の前の石の壁は柔和で汚れた様な彫刻を連続させながら、朝の光に晒され、さらにその細部においては、一つ一つの石の結晶を非常に鋭い、零れそうな光の乱反射に分解してみせる。また、壁にはどす黒く、人の手垢、汗、血、その他様々な排泄物が付着しているが、それら黒々として生活の痕跡は石の結晶と結晶の間に忍び込み、壁の内部の暗闇と結びつこうとしている。壁の内部では、石の重量が静かに、動くことなく地中に沈みこみ、地上のゴチック建築と同じ形の闇の建築を、深く埋めこんでいる。ぼくの体は、石の重心に向けて闇の間に吸い寄せられ、さらに建築群の中心に向けて闇の門を通り抜け、暗い並木道に吸いこまれてゆく。石造建築に

深く切れ込んだ谷底に並木は続き、見上げると岩壁の上部から埃のような光線が降つてくる。プラタナスの緑はその下で震え、やがて耐えられなくなると、太陽のかけらを群衆の上に零す。木漏日は人々の要毛を突如として金髪に変え、緑眼を碧眼に変える。その度にぼくの睡眠不足の眼球は赤い血管に被われる。光が眼球に突き刺さり、色彩を網膜に焼き付ける。ちらちらと人々の視線は乱れ、乱雑に並んだテーブルに肘をついて語りあう男女に白や黒や褐色の肌に、プラタナスの緑、パラソルの赤、日除けテントの黄色が舞い降りる。それらはさらに太い男の腕や女の腿に華の輝きを与え、吹き出しそうな歓喜に満ちあふれ、様々な国籍を乱交させている。彼らの視線が笑いながら、ちらちらとぼくを見る。それも木漏日のせいで、ぼくの姿がちらちらとしか見えないからだ。

先程から、ぼくは一つの椅子に着こうとしている。睡眠不足のせいで、もう歩き疲れているし、喉も乾いている。そして何よりもこの舞い狂う光の激しさに眼をやられている。ぼくはまったく自由に一つの椅子を選ぶことができる。手荷物をテーブルの上に置いてから、リュックサックを地面に置けば、ぼくは彼らのように坐ることができ。だが、まったくの任意性のただ中にありながら、ぼくはその華やかな光の世界におじけづき、単純で不自由な歩行を延長している。そうしないとぼくの肉体はばらばらに分解しそうなのだ。木漏日が人体を様々な色彩の断片に分解し、コスマボリタンたちの花の表情を、咲き乱れるコスマス烟に変えてゆく。だからぼくは歩行の不自由さにしがみつき、肉体という牢獄に自分を閉じ込めようとしている。誰もぼくのことを見るな。ぼくについて語るな。そしてぼくの前では單なる映像になり、無関係な彼、彼女、そして彼らとしてだけ存在すればよい。と思ったとたん、いきなり人並を破つて駆けぬけてくる少女が二人、叫びながらぼくに飛びかかりそうになった。一人は長い黒髪で、もう一人は綿のような黄色の巻毛だが、二人とも同じ色のジーパンをはき、手をつな

いだまま腰骨でぼくにぶつかった。その感触を大切にかえこみ、それがどちらの女のものかと振り向くと、歩道の脇に一台のシトロエンが停車している。車の窓には三人の少年の顔が待っている。少女たちが窓から飛び込むと、二つの大きなお尻がつかえて両脚をばたつかせている。中の少年がそのまま二人をひきすりこみ、ブラウスがまくれ、白い肌に黒いブラジャーが見え、なおもぐいぐいと腕や首をひっぱられながら、男に抱きついで音の出る接吻の後、やや落ち着いて、車の中にお尻をヨンで走り去る。あちこちに爆笑が沸きあがり、ぼくの顔もグニヤグニヤになっているのは笑っている証拠だ。横の女は中年で、東洋人も笑っていると言つては笑つてゐる。よく見ると、この古びた女には同時に二つの顔があり、その一つは人なつっこい淋しさ、もう一つは爬虫類のように堅い皮膚で威厳にしがみつこうとする怜俐さ。その二つが重なつて見えるのも、きっと木漏日のせいだ。どの顔もどの顔も陰りの中では優しくほほえみ、光の中では髑髏のように冷たく輝く。ぼく自身も光の中で緊張し、翳りの中で安息する。そうだ、スペインの醫りの部分には安息という言葉がよく似合う。たとえば並木の間から容易に垣間見ることのできる中庭の噴水のあたりでは、一瞬空気の静止した空間に出会うことができ。そこには一つの椅子がぼくを待つていて、長い沈黙を溜めている。ぼくは巨大なリュックサックの重量から逃れるために背筋を伸ばし、両親指を肩に食い込んだベルトに差しこみ、背骨を左右によじる。投げとばされないようにベルトを外し、ゆっくり抱き寄せてからリュックは地上に寝かす。

中庭から駆け抜ける風が石壁を伝つて背中の熱を奪い去る。背中を石に押し当てて眼を瞑ると、噴水の音が中

庭の中心を決め、その周囲では鳩の声が水玉の音と対話している。目を開くと、カフェテラスのテーブルの間には何本もの石柱が立ち並び、アーチ状の内壁を支えている。内壁のただれた大理石は石灰水をしたたらせ、様々な文様を描いている。その上を一匹の蝸牛がゆっくりと

が氷とガラスの間に注がれるところだ。氷は身震いして少し溶け、ごろりと寝返りをうつて浮かび上がる。噴水の鳩たちが眼の色を変えて近づいてきたのはその時だ。首筋をそろえて群がる鳩たちの中心には、何やら転がる物があり、鳩を見てこずらせ、足の爪でつかみかかる



登りつゝある。背中の重量に悩まされ、垂直に移動する。ぼくは呪いのつもりでジユドランジュと給仕に告げて、眼を閉じる。すると蝸牛の残像がしだいに大きくなり、ついにぼくの体より巨大なものとなつたので、あわてて眼を開くと、給仕の大きな手の中からオレンジジュース

つてもつかまらずに球体はどんどん近づいてくる。ようやく見えそうな距離になつたところで給仕の足が踏み潰す。いきなり液状に変化して、砂の中に吸い込まれそうになつた生物は、再び全身の力で収縮し、蝸牛の形を再現してみせたが、翼を広げて大喜びの鳩たちに、様々な

ペクトルに分解され、その形は断片に、その軟体は粘液に、その悲しみは悦びに変化して、鳩の平和な胃袋に流れ込む。すると、それは先程壁の上に見た蝸牛かと思つたが、再び眺める壁の上には数匹の蝸牛が群があり、どうがどれだけ分らない。それどころか、あちこちのテーブルには焼きあがった蝸牛が美味そうな匂いをたてながら運ばれてくる。おそらく、壁の上の蝸牛は野性のものではなく、このカフェテラスの奥の調理場から逃げだしたものにちがいない。いわば脱走犯だ。それに蝸牛は単なる食物だと思うと、なんとなく落ち着いて、その安心を確かめるために、ぼくはエスカルゴとビールを注文した。空腹と睡眠不足のため、ビールは喉からいきなり背骨に染み込んで、頭のてっぺんから青空に蒸発してゆく。目蓋が重く痺れ、その痺れが全身に落ちてゆく。すると蝸牛の残像が再び少くらみながら近づいてくる。よく見ると、それは蝸牛ではなく、今朝、港の広場で出会った盲人が。盲人は杖を触覚のように操り、ゆっくりとランプの並木道をのぼってくる。ぼくの前まで来ると、立ち止まり、ぼくの足下を杖で探り、△そこをのいてくれ▽と言ふ。△どうして▽と尋ねると、△そこに忘れのをした▽と言う。△それは何か▽と聞くと、盲人は黙つてサングラスを外す。右眼には眼球がなく、真暗な眼窩がぼつかり開いていて、そのため顔の中は空洞に見える。左眼にも眼球はないが、その代りに大きな蝸牛が埋めこまれている。その渦巻状の目玉のため、これは何かの冗談だろうと思つたが、いつまでも席を立たないぼくにいらいらした盲人は、いきなり杖を振り上げて、ぼくの脳天に一撃を加えた。眼の前が真赤になり、その赤がいつまでも消えないで顔を拭うと血だ。全身の筋肉が震えだし、その震動をすべて右腕に集めて、ぼくは盲人の顔をなぐりつけた。あおむけに倒れた盲人の顔から眼球がころげ落ち、鳩たちがそれを追いかける。しばらく盲人は眠つたような息をしていたが、突然両唇を上下にピクピク痙攣させ、白い歯を奥歯まで見せながら、

泡を吹き出し、背中を二三回ゆすつたかと思うと、喉を引き裂きながら、喉のさらにさらに奥から、この世のものとは思われぬ鋭い叫びをあげ、そのあまりの大きさに壁の蝸牛は縦て地面に落ちた。やがて盲人の眼窩から触角が伸び、耳からも鼻の穴からも柔らかで半透明の触手が現われて、わなわな震え、大気の中に手振りを求めていたが、やがて大地を探り当て、ぜいぜいする息が口の泡を吹き飛ばし、泡はおびただしい量の粘液に変質し、それが彼の皮膚や衣服を溶かし始め、ぬめぬめと輝きながら、なめらかな白い肌に青い血管を浮かび上がらせ、青黒く内臓のありかを示すのだ。

悪い夢を見たものだ。何もかもあの鳩のせいだ。ぼくの額には粘い鳩の糞が張り付いて、向こうの隅から一人のアラブ人が笑いながらぼくを見ている。いたたまれなくなつたぼくは席を発ち、再び並木道を歩いてレストラントを探した。

(つづく)

月刊神戸っ子1980年新年会

・ごあんない。

1月14日<月> 午後6時より

神戸・元町・風月堂ホール

会費 <¥4,000>

・プログラム。

第4回神戸文学賞受賞式他

大変なごやかな文化交流会です。

ぜひご参加下さい。

・お問合せ。

月刊神戸っ子 tel 078 (331) 2246